

風景デザインレター from 九州(第 47 号)

もう一度、風景の見方を整理してみたいと思います。それも日本風(「風」というのは、胡散臭いと以前書きましたが、その胡散臭い方法で)に考えてみます。今回参考にしたのは、建築界の大御所磯崎新の「見たての方法」で。この本も、しっかりしたケースに収まっている豪華本で、鹿島出版から出ている全集のような形で納まっています。

副題が、「日本的空間の読解(読み解きと呼ぶ?)」とそのものずばりです。

【風景の読み解きを再考する】

「見立て」とは、「類似性を媒介として、連想を喚起し、対象を分節化していく手法である」と磯崎新はいいます。なんと、わくわくする言い回しであることか。

日常的に、どこでも私たちの周りに出現する風景は、見ようとしていない限り見えない存在でもあります。そして、そのような風景を日常的に見る見方が習慣化し、風景の目利きになることができて、はじめて、「見立て」ができる人間として、風景を解釈しなおし、かつ、生きているこの環境を愛でることができるようになる、そんな一つの生きていく価値向上というような目安の一つになるものです。

ながらく、環境系の部長としてやってきましたが、悲しいかな記憶力が乏しく(年のせいもある?)、植物、魚、昆虫などの名前がほとんど覚えきれなかったのですが、それでも、いくつかの生き物の名前を知っているということが、どれだけ人生を楽しくするものか、それは十分に理解できます。(ちなみに、最初のころ、部員に、魚で 200 種、植物で 500 種ぐらいは覚えてください。それでなんとかなりますとアドバイスをもらったのですが、・・・)

庭づくりを専門としていた昔の日本人たちは、庭そのものを空間を見立てることで、名庭を創り上げてきましたが、風景に対し、どれだけの知識を持っていたことか。そして、それを、日常的に類型化する努力と、新たに挑む空間に対し、連想というタイプの想像力を

発揮し、何をそこにメッセージとして描くかということ、分節化することで、表現する努力をしてきたことか。(ちなみに、「分節化」とは、「分類」のように客観的な事実によってわかることなく、主観的な区分のようなものかと思っていますが。違うかな?)

その際、少なくとも「連想」というのは、どれだけ多くの情報を、それも単なる情報をデータベースとしてではなく、連想というあいまいだけれども微妙な関連性をも含む検索に対応する能力を必要とする力が必要と考えられます。

さて、私たち技術者が、どこまで、この風景の見立てができる能力や経験を積んでいるか、あるいは、その努力をしているのだろうかというといささか疑問でしょう。

唯一、目に見える形で、それを積み重ねられているのが、岡村さんの「フォトメッセージ」だともいます。この活動は、毎日毎日、日常的に接する風景を、そのような目で見える訓練でもあり、また、まさしく、それをメッセージとして伝える手段としても発信しているということでしょう。(岡村さん、お疲れさんです!!!!)

若い、あるいは中堅の技術者のみなさん、少しは、岡村さんを見習って、毎日の行動に活かされてはどうですか。通勤時に、あるいは出張時は最高の時間です。仮にカメラを持っていなくても、接した風景をメモする、あるいは 5 分程度の時間があれば、ラフなスケッチを描いてみる(カメラを持たずに出張するという心持は、私に



は理解できませんが)

思い出話ということで書き足させてもらおうと、若かりし頃、上司といっしょに列車で出張しているのを叱られた経験があります。なぜ、せっかくの窓から見える風景を見ようしないのかと。東京から北に移動するに従って、屋敷林が見えてきたり、川を横断するときは背後の山の状況で河床形態の違いが分かったりと、勉強することは山のようにある。本なんぞは、自宅に帰って部屋で読めと。(もちろん、その上司とは私のお師匠さんの久保田部長(当時)ですが)

当然ですが、行き帰りの通勤の際の風景を見るだけでは、分節化まではできないでしょう。気になる風景に出合ったら、やはり、その風景の成り立ちを勉強したり、あるいは、地元の郷土史家の方や、ご年配の方に話を聞くなり、そんな努力も必要でしょう。しかし、そのような努力は、間違いなく人生を大いに豊かに楽しくしますよ。

残り僅かということもあり説教臭くなって申し訳ありませんが、最近では、説教してもらえない上司がいなくなっているという話もあるので、OK かな。もしかすると、残りの 3 回は、説教話や昔話、自慢話になるかも。その時は、ご勘弁を・・・・・・【あと 3 回続く】